

山に記録された神武東征

白崎 勝

1、はじめに

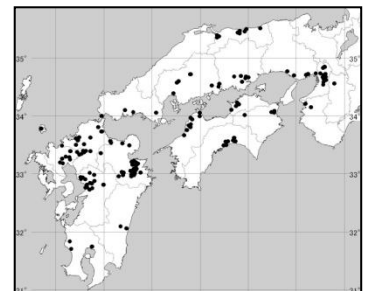
神武東征の行動の跡をつたえる伝承は、西日本各地に沢山残ります。1例として広島県発行の「神武天皇聖蹟誌」では、広島県下に伝わる伝承が詳しく記録されています。これらの伝承を記紀の記述から、逆に創作するなどとは不可能なことです。

2、破鏡は親子の絆

また考古学的遺物での神武東征の立証には「破鏡」を挙げたいと思います。破砕された鏡に穴を開け、断面を鋭角に後加工などした鏡片を破鏡と呼び、全国で600片を超えて見つかっています。

西日本では、弥生時代後期から古墳前期の、集落の住居跡や溝で見つかっています。考古学では、これを「廃棄された鏡」と解釈していますが、私は東征の最中、持ち歩いた人が落としたか、戦いの中の激しい動きで紛失した鏡では無いかと考えています。

出征に際し、家の鏡を割り妻や親子で、その破片を分け持って、親子の証にしたと思います。親たちは、子供が帰った時、誰の墓か分かるように、破鏡と共に骨を埋めたのでしょう。破鏡の分布をみると、図のように北部九州では分散して見つかり、戦いのあった場所と思われる。河内や熊本平野、大分に集中的に多く見つかります。紛失の考えを裏付けています。

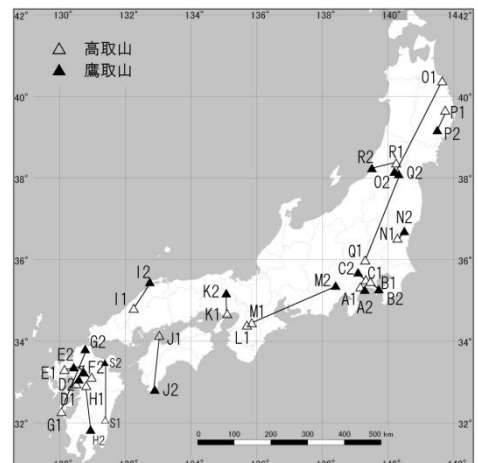


3、消えることのない山への記録

神武東征は、地名も定かでない時代のことなので、その記録はままたらなかつたと思われる。いくつかの部隊があつたと思われるが、記紀に記録されたのは、最後まで生き残つた神武の記録が中心になっています。

そんな中、各部隊は消えることのない山名に、工夫をこらし計画的に記録していたことが分かりました。同名・同種の山が、日本には多くある不思議は、誰もが持っていると思いますが、それがこの古代の記録だったわけ。その山名の配置や連なりから、見えてきた東征の実態をお話しします。

山名への記録の第1層は、「たかとり山」です。「たか



とり山」には、高いを取ると書く「高取山」と、飛ぶ鳥の鷹を取ると書く「鷹取山」の2種があります。これが対で、全国に17対配置されていて、東征隊の進行方向を記録したベクトルになっています。東征隊が「高い高取山」から「飛ぶ鳥の鷹取山」方向に進んだ記録だったのです。

奈良から西は神武東征、東は日本武尊の東征記録です。同じ方法で記録しています。神武東征隊が、出雲、四国、丹波に遠征していたことが読み取れます。

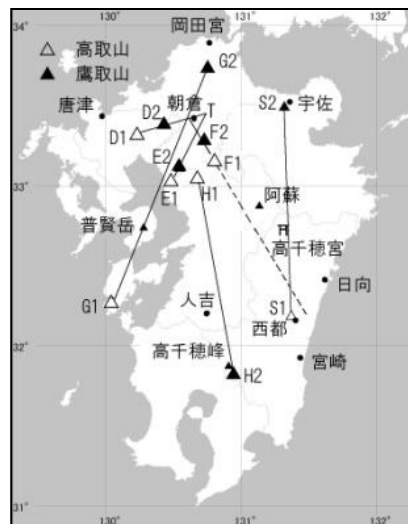
4、神武東征出発の様子

神武東征が出発した、九州の記録は大変重要です。図は九州に見つかった、6対のベクトルです。

宮崎の西都原から宇佐に、真北にのびるベクトルは、記紀が記す出発のベクトルです。記紀は、神武が船で出発しているので、小部隊での神武東征の説があるが、陸上部隊があったことが、このベクトルから見えてきます。

D, E, Fのベクトルは、朝倉付近に三角域を形成しています。ここは、邪馬台国にあったと魏志倭人伝が記す倭国の都で、当時は台与（豊受大神）が住んでいた、高天原と思われます。

Fのベクトルから神武兄弟は、高千穂宮で東征を相談し、まず高天原に向き倭国連合を図ったものと思われます。神武兄弟は北部九州から天孫降臨したニニギの末裔ですから、当然な行動です。



5、古事記は出発前に、筑紫に向いたことを記録している

古事記は出発について、次のように記述しています。

「すなはち日向より發たして筑紫に幸行でましき。故、豊国の宇沙に到りましし時、・・・」

これを順次式記述と考えれば、まず筑紫に行ったこととなります。後述の「筑紫の岡田宮」とは、文字が異なる「筑紫」を用いているので、異なる場所です。

先のベクトル図と古事記の記述があつてくることとなります。

<p>東征出発の記述</p> <p>「すなはち日向より發たして筑紫に幸行でましき。故、豊国の宇沙に到りましし時」</p> <p>1、順次式では、まず筑紫へ。</p> <p>2、筑紫の岡田宮とは文字が異なる</p>
--

6、神武東征は南九州と、北部九州の連合部隊

D・Eのベクトルは、筑紫平野の人たちが、東征のため高天原に集合したことを記録しています。天草から北九州にのびる長い直線は、天草や島原の人たちが、高天原を経て北九州に向かった記録です。

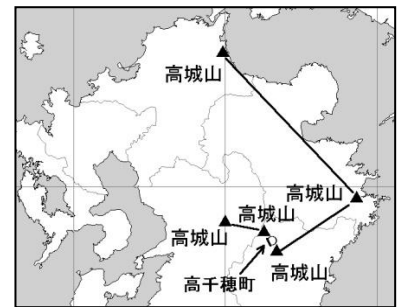
神武隊と合流するためです。この隊の記録が記紀に無いのは、東征の途中で亡くなった、五瀬命の隊だったためと思われます。Hのベクトルは、一旦、日向に戻った神武隊のベクトルと思われます。東征の準備をして、出発するためです。このベクトルが、

狗奴国比定地の熊本を通過しているの、この時、決着の戦いがあったと思われます。

7、狗奴国との決着の戦いがあった

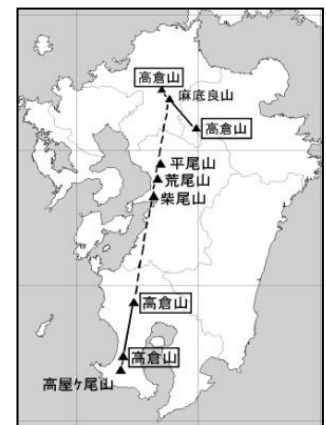
熊本平野で戦ったのは、主に高城山を残した部隊と思われる。図は九州にある高城山を結んだもので、南阿蘇に始まり、高千穂町を経て佐伯で、神武隊に合流したと思われる経路です。

邪馬台国の南に合った狗奴国が邪馬台国を倒し東征したとする説がありますが、この山による記録からは、否定されます。



8、豊受大神（台与）は、日向三代のお別れをした

次の左図は、九州にある高塚山を結んだものです。日田近くから始まり、高千穂町を経て西都原に進んだ後、人吉を経て、薩摩半島に向かっています。これは戦いの経路でなく、女性の台与（豊受大神を）を守り薩摩半島に向かった経路と思われます。



豊受大神、東征時の足跡は、高倉山に記録されています。

九州には2対の高倉山があります。一つは朝倉付近で、天照大御神(卑弥呼)の墳墓と思われる麻底良山を指し挟んでいます。

もう一つは、薩摩半島にあり、ニニギと木之花佐久夜姫が出会った阿多を指し示しています。その反対方向が麻底良山に向いていました。

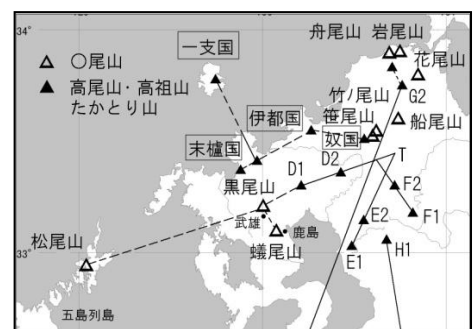
天照大御神への別れと、日向3代への東征の報告と加護を祈った記録と思われる。

9、博多湾沿岸国の動き

魏志倭人伝が記す博多湾岸国の、東征参加は高尾山に記録されていました。壱岐から点線で記したように、結ばれていて大宰府付近で本隊に合流しています。

高尾山は「高い尾と書く高尾山」「高い雄と書く高雄山」「飛ぶ鳥の鷹の尾っぽと書く鷹尾山」があり使い分けされていました。

これら高尾山は、高取山のベクトルを補佐する、第2層に位置する山と考えられます。第3層は、高尾山の高の1文字を変えた○尾山です。この○尾山は越えた峠や、船をつくる木を切った山、船を留めた港など様々な事を記録していました。



10、神武本隊は山陽道を進む

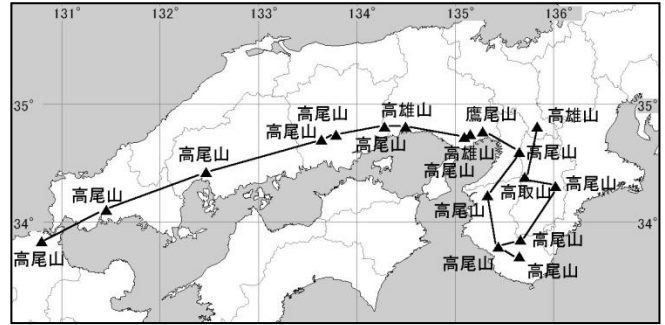
九州の水巻町に始まる、山陽の高尾山の列は、神武本体の経路です。

播磨との境の赤穂では、高い雄（オス）と書く「高雄山」を用いて区切りとしています。

六甲さんにも同じ高雄山があり、これから河内に入る区切りとしています。

芦屋の飛ぶ鳥の鷹尾山は、丹波や京都盆地を遠征した隊の合流を記録しています。

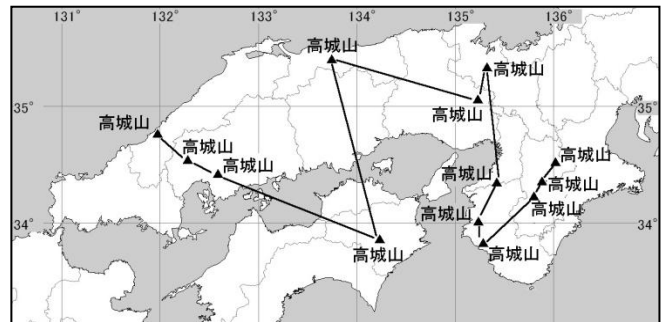
孔舎衛坂の戦いで負けて、熊野に迂回したことも、確実に記録されています。東征最後の地点は、京都府井手町の、高いオスの高雄山です。



11、高城山の部隊は、四国・鳥取・丹波を転戦した

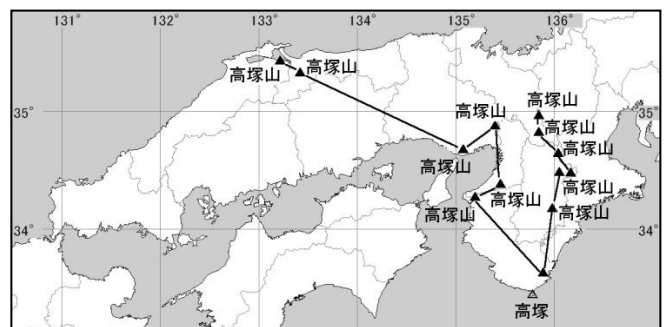
次の図は狗奴国と戦ったと思われる、高城山に記録された部隊の経路です。

四国、鳥取、丹波と遠征しています。やはり河内で負けたのち、和歌山に下り、宇陀に向かった記録です。



12、高塚山の部隊は、豊受大神を出雲に送った後、戦いに参加した

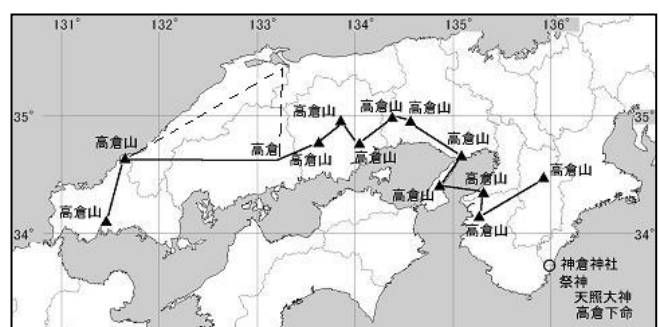
九州で豊受大神を支援し、高塚山に記録した部隊は、出雲から始まる記録です。出雲は豊受大神の生まれ里なので、ここまで支援してきて、別行動になったと思われる。やはり、和歌山から熊野に回り宇陀に進んでいます。高尾山と同じく、京都の井手町付近の高塚山が最終地点です。



13、豊受大神は高倉山に記録した

図は豊受大神の経路と思われる高倉山を結んだものです。

豊受大神が出雲に立ち寄ったとすると点線のような経路になります。須磨から淡路島に迂回しているので、戦乱の地の河内を避けたものと思われる。



和歌山から、宇陀に進んだようで、宇陀で終わっています。高倉下は熊野に神剣「布都御魂」を届けています。和歌山にいた豊受大神の使いをしたものと思われます。

1 4、いつ頃のことか

台与による晋への最後の遣使、265年の5年後に、神武東征の出発があったと考えます。6年をかけた東征は、275年に終了したと考えます。翌年に皇后をむかえ、さらに翌年、277年に橿原で即位したと考えます。

	卑弥呼の共立	誓約	天の岩屋隠れ	通運藝命の誕生	天孫降臨	須勢理毘売の誕生	山幸彦の誕生	大国主命の結婚	事代主命の誕生	鵜茅草葺不合命の誕生	神武天皇誕生	卑弥呼の死	国譲り	神武の後誕生	最後の遣使	神武東征出発	神武東征終了	神武結婚	神武即位
神武天皇											0	3	11	15	20	25	30	31	32
鵜茅草葺不合命										0	4	7	15	19					
豊受大神												11	19	23	28	33	38	39	40
山幸彦							0	13	15	16	20	23	31			45			
通運藝命				0	12	13	16	29	31	32	36	39	47						
忍穗耳命		13	14	18	30	31	34	47											
天照大御神	13	19	20	24	36	37	40	53	55	56	60	63							
須佐之男命	11	17	18	22	34	35		51											
須勢理毘売						0		16	18										
大国主命								20	22				38						
事代主命									0				16	20					
伊須氣余理比売 又は五十鈴媛命														0					16
西暦	198	204	205	209	221	222	225	238	240	241	245	248	256	260	265	270	275	276	277

■ 内の値は想定年齢、西暦の太字は魏志倭人伝から導いた西暦です。

1 5、規模その他のこと

兵は数千〜一万を超えたと推測します。根拠は磐余（天香久山の北東域）に大軍が集まり、人で溢れ返ったと日本書紀は記しています。

その磐余伝承地の桜井市南西部の池の内、橋本、阿部と橿原市東池尻町の平坦部の面積が約10万坪でした。10坪に2人と仮定するとかなりのごった返しになると思います。家族との再会で半数が家族と仮定すると兵は1万人になります。

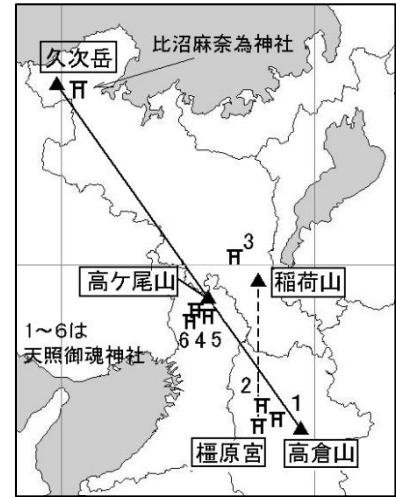


豊中の庄内で見つかったことによる名付けの庄内式土器は、厚味が大変薄い特徴があります。これは、東征の途次、多くの兵への炊き出しの時間を早めるために、

生まれた土器と考えます。根拠は神武東征の陸上隊が出発した芦屋と淀川を渡った高槻への経路にあるからです。

東征を境に銅鐸は消えるが、豊受大神が鏡を鑄造するために銅の供出を求めたためと考えます。埋められた銅鐸や銅剣の発見は、この銅の供出を拒否し埋められたものと考えます。根拠は、東征隊は鉄を使っていて、鏡を造ったのは神武東征隊でなく天照大御神の後を継いだのは豊受大神と考えるからです。境作神社に天照御魂神社があることもその根拠です。

奈良、摂津、京都に見つかる、天照御魂神社は豊受大神が東征終了後、これまでの国造りに大きな貢献をした人たちに、東征達成の報告とこれまでの加護を感謝したものと考えます。根拠は、宇陀から丹波の久治岳に向かって直線が見つかり、その経路に天照御魂神社があるからです。



豊受大神は神武が即位すると、兵たちが南九州と北部九州で対立の原因となることを避け、丹波に身を引いたものと考えます。

以上